山梨醫家列傳

鈴木唯美著述

特 25
218

山梨醫家列傳目次

（姓名いろは順）

飯田格仙君　磯野久丸君　石川三津造君
石井春五郎君　早川恒祐君　小野鶴君
長田伊佐君　河合立玄君　吉岡順作君
横田藍十郎君　田邊以節君　高尾章君
辻保順君　長嶋安龍君　中田隆吉君
内藤知久君　成田敬爾君　野呂勉君
大久保盛君　山下正策君　增澤玄民君
丸茂文哉君　前嶋玄長君　小泉景義君
小池勝君　遠藤寛君　雨宮文亮君
齊藤國一郎君　菊嶋七造君　島津庄太郎君
菊池元吉君　本村博長君　平田房平君
下平用彩君　新海宗四郎君　杉田保光君

須田逸作君　鈴木憲君　夏見義處君
桑嶋尚謙君　深澤清君　伊庭秀榮君
磯野豐君　飯嶋次之助君　三嶋義成君
（以上）

山梨醫家列傳

東八代郡北八代村　飯田格仙君

君父を格榮と稱す家々醫を業とす君に至て蓋し九代頗る舊家たり君の幼なるや武州八王子の人丹岸某に就て漢籍を修むること凡そ四年專心之に從事せり後去て家に格榮の傍に在り漢法醫學內外兩科及び產科を修む上進最も早し旣にして自家に開業す時に明治元年十月なり然れとも君の精神たる誓て大成を將來に期するに在り同五年より十一年に至る山梨縣病院へ通學して又益す醫術を研究し翌十二年試驗登第縣廳より醫業鑑札を下附せらる君激勵進んて止まざるの勢あり尋て師範學校醫學部に入る此時發憤勵所の如し故を以て同年中直ちに病院備醫員に拜命す蓋し君が達せんと欲する目的の岸頭稍近づくものゝ如し然れども君未た之を以て足りと爲さゝるなり同十三年一月を以て出京し濟生學舍々長長谷川泰に從ひ或は順天堂に就き西に學ひ東に驗し黽勉困苦遂に大に得る所あり同年中東京府廳より內外科醫術開業免狀を

下附せらるゝ既にして歸鄉し今の自宅に開業す名聲日に加はり患者常に門に充つ盛んと謂ふべきなり君の人と爲り獨り克く醫に長ずるのみならず識量宏博胸中經理の才淺からざるを以て益す地方の人望あり明治十九年撰ばれて縣會議員となり盡す所尠しとせず君年高し其醫術に於ける頗る老練の聞へあり內外科共に其巧を極むる所にして而して產科は特に其長する所なりと云ふ其地方衞生會の委員となり又は獸疫檢査醫となる如き君の素務上些末の點に至りては未た悉く擧くへからざるなり

甲府市三日町　磯野久丸君

君父を淳道と稱し既に亡せり家世々醫を業とし頗る舊家とす君は其二子なり資性沈着其事に接するや深思默考而して後徐々之が計畫處置を爲す常に其方を誤らず識者之を評して曰く此兒必らずや大に將來に爲す所あるへしと明治十二年一月山梨縣中學校に入る即ち君十四歲の時なり爾來汲々研磨怠らす殆んと將に卒業せんとす會々る三年未嘗て一日も卷を拋たさるなり既にして十六年山梨縣會の議決に由り病院醫學所の廢するや新に醫學縣費生を募集し他府縣醫學校へ留學せしむるの事あるに會す是に於て曩者の半途退學したる者爭て之に應し選拔せらる君も亦與れり乃ち同年八月命を受けて千葉縣甲種醫學校に留學し拮据黽勉四年一日逐に能く卒業證書授與の榮を得て歸縣せり會々本縣谷村分病院醫員缺く君召されて之に補す然れとも君常に有爲の志あり區々に潔しとせざるなり故を以て之を辭し去て千葉縣に再遊し大に修むる所あり又去て東京に出づ居ること數月外科眼科を專攻し或は大家に就て治術を實際に究め或は同僚を問て意見を討論し一居一止皆其目的を達し素望を遂げんとするに非ざるものなし不幸にして君二豎の爲めに犯され未だ充分に其目的を達せずして歸縣したるは君の常に遺憾とし他と語る所なり然れとも君自ら之を慨むのみ其治術發達の如きは世自ら知る所あるへし況んや君精神毅然少しくも屈せす今より後尙ほ進んて出京し諸大家諸國手に就き遂に其大成の目的を達せんとするの志蓋し

確として拔くからさるものあり現在奉仕する本縣病院の當直醫監獄詰の如き未だ以て君をして怡安せしむるに足らさるなるへし君尙ほ春秋に富めり頗る將來に賴むへきものあるなり

東山梨郡松里村　石川三津造君

君は神奈川縣下武藏國西多摩郡福生村の人なり慶應三年六月を以て家に生る本姓横田後養家を嗣ぐに及て今の姓に改む父を東介と稱し幕臣たり君は其二男なり明治六年福生學舍に入り普通學を修む當時尙ほ年幼と雖とも全舍中に於て嶄然頭角を露はせり全十二年に至り全科を卒業し尋て同地の碩儒某に就て漢籍を修むること二年許其十四年一月醫術修業の爲め埼玉縣高麗那岩淵村なる醫師山崎眞に就て始めて醫學を修めたり當時政論天下に囂然口政治を談せさる者は人にして人にあらさるものゝ如く各々政治・法律の學を修め政治思想を涵養するの狀勢となれり君亦政法を講究するの必要を感し斷然決志東京に遊學し各所の塾に通學して專ら政治法律、經濟の學を講し兼て英學を研究す會ま同府下に英吉利私法律學の創立あり君乃ち卒先之に入る時に明治十六年なり君姓機敏早く已に政法の學を習學せり此時に當り同郡熊川村醫師石川一作嗣なきを以て君をして家督たらしむ是に於て君又醫學を修むるの止むを得さるに至れり既して降て明治十九年に至り東京醫學專門學濟生學舍に入て醫學を專攻し又佐藤進氏の門に入り心中業務の速成を期せるを以て休日祝日あるを知らす晝夜の別なく其寓所に蟄居して勉勵し旦つ實地治術に從ふ等寸時の倦怠なを聞く者其勉强に感せさるはあらさりしとなり其精神如斯なるを以て上進頗る早く遂に其十九年十一月內務省の成規を履て前期試驗に及第し尋て又各病院に實地を練習し居ること一歲餘二十一年五月遂に克く後期試驗を完了し內務省より醫術開業免狀を下附し醫籍に登錄せらる時に君年二十歲なり是より子愈益す奮勵し醫學の蘊奧を攻究する爲め本鄉區々醫加治寬次氏に就て事に代診に從ひ專ら裁判醫務を研究し精神確立益す進んて熄まさるの勢あり會ま子二醫の爲めに犯さるゝを以て轉地療養の

爲め始めて山梨縣下に來たるなり當時同地方は從來醫ありしのみにして卒業醫と稱するは僅々二三名あるに過きす不便甚しと謂ふへし子歸鄉し病癒ゆるの後他の病客の依囑に依り診療したるに其治術の精巧なる人皆之に服せさる者なし遂に子を留めて止まされは君茲に其の請を容れ現在の地に開業するに至れり爾來致々衛生の業に從ひ久しく司命の業に當れり此時に際し子非常の信用を博し峽東の良醫を數ふれは先つ指を君に屈するに至れり且つ同地方に衛生會及ひ演說會等ある毎に子必らす出席して會議に參し演說する等其一般公衆に裨益せしこと尠きにあらす然れとも君の素志たる英學を修了し業成るの後海外に遊學するの決心なりしに病の爲めに其素志を果さす遂に峽中に止まりたるも海外留學の事は恒に其念頭を去らされは早晩其素志を達せんことを期するとなり子行爲端正識量富贍思者に接する飽くまて悃誠切實其至情を竭さんとするの精神たり然れとも同地に良醫の乏しきを以て病客擧けて其に集まり勢ひ遠地の往診等は謝絕せさる可らさるに至れり且つ當時身体不健康にして療養の爲め在宅の日少きを以て病客の請に應すること能はさりしは寔とに其當時に遺憾とする所なりし而して今は漸く其希望を充たさんとするも畢竟一身の治療限りあるを以て衆多病客の內或は其請囑に應する能はさるの時あり遺憾止まさる所なりと云ふ子の治療上に於ける毫も貧富を以て厚薄を異にせす病客の赤貧者には屢は施療等美舉の觀る可のも尠なからす故を以て日に益す其信用を博するに至りしとなり然れとも子は元來獨り濟生の一點にのみ其思想を傾注するを欲せす如何となれは性命財產は人の最も重んして雙者其一を輕視すへきにあらす是を以て先つ其身体の健康を保たんが爲めには醫學を修めさる可らず而して財產を保ち權利を全うせんには法學を修め之を知得して他の侵害蹂躪を避けさる可らす之を要するに醫學法學を兼修せんことが年來の目的なりし是を以て明治二十一年十月を以て東京專門學校の校外生となりて復ひ政治法律、經濟の學を講し及ひ英學を研究せしが嚮きに憲法の發布あり次て條約改正の事あるや西に東に政論囂々尋て新法典の發布ありて人民一般此成文法の保護の下に棲息するものなるを以て子益す斯法を講究し其運用を明かにするの必要を感し晝間は自ら其醫療の本務を悉くし夜は政法講究に汲々とし鷄

鳴て猶ほ未た寐ねさるに至る研磨頗る勉めたりと謂ふへし是れ固より一方に偏倚し區々齷齪たる者流の學ひ得る所にあらす蓋し子材諸務に渉り君彼是を兼ぬ亦得易からさる人なる乎

北都留郡猿橋驛 石井春五郎君

君は北都留郡富濱村(宮谷組)の人なり父を久右衛門と稱す君は其長男なり諱は麟趾、芙蓉と號し又桂厓と稱す文久三年四月を以て家に生る天資沈毅敏達幼より大志ありて克く堅忍敢爲の氣象に富めり明治十年擢てられて其鄉黌の助教となり同十一年中黑澤成壽に就て漢學を修め其十二年野田尻學校に聘せられて之が教員となる其甲府に在るや進德社教頭矢野道雄に就て漢學詩文學を修め後又其鄉里なる盈科義塾に入り覺井諦曉氏に就て同しく漢學詩文學を學ひたり其勉むるや夜以て日に繼ぎ孳々として倦ます故を以て幾何ならすして學術大に進みたり後同郡葦垣校の招聘に應して教員となり之が教務に服するや會ま回祿の災あり君が家產舉て皆烏有に屬せり君更に顧慮する所なく鋭意蒸陶に從ひしを以て生徒の進步たる他校其比を見さるに至り隨て君の名聲も益す高く四方望を屬する者甚た多きは亦以て君の榮とするに足るへき乎然れ共是等細節の業務たる君が眞の目的にあらさるなり是を以て斷然職を辭し去て東京壬申義塾に入り大熊春吉に就て獨逸學を修む時に明治十五年一月なり尋て十六年に至り傍ら濟生學舍に通學し長谷川泰、丹波敬三、綠木喜三、飯盛挺造、高橋秀松、石川清忠、今田東、山田良叔、片山芳林、石黑宇宙次、伊勢錠五郎、榊叔、甲野榮、片山國嘉、山崎元修等の諸學士に就て醫術を研究し既にして大に得る所あり同十八年十月內務省成規の醫術前期試驗に同二十年十月其後期試驗に及第し遂に同年十二月醫術開業免狀を下附せらるゝに至れり是に於て克く君が目的の半を達したりと謂ふへき乎越て二十一年を以て歸縣し鄉里富濱村に開業す四方患者の治を乞ふ者日に月に益す多きを致せり時に奥蔵確、篠原良和、小泉景義の諸氏あり亦た皆醫を業とす君之と謀り峽鶴衛生會を設立す同地衛生法の普及し暗に其健康を保護したるもの

蓋し同會之をして然らしめたるなり居る少焉にして君今の所に移り開業す亦た患者前に減せすと云ふ君の業務に就けるや眼中唯た醫事あるのみ復た他事を見ず患者の診斷、病門の往診是れ日も亦た足らさるものゝ如く若し夫れ深夜往診を來り乞ふ者あるときは子直ちに行裝を整へろの路の險峻と泥濘とを問はす直ちに之に赴く故を以て父老皆其懇篤親切に感せさる者あらす遂に今日の隆盛を致すを得たり而して子醫術の最も行はるゝは內科及び眼科に在りとす子の醫療に長し信切に厚きこと已に此の如し而して其風格又大に通常と同じからきるものあり自ら持する謹直にして言寡く其事物に接するや勉めて公明正大を守り沈思默考而後之を處す故に事其當を失はす人皆之に服せさるなし其東京に在るや原田豐、岡玄卿等の諸大家を叩て其高論を聽き或は各病院に出入して其手術を實驗する等一として業務の資たるを務めたるにあらさるはなし性又汎友を好ます唯た時に二三の益友と交はるも時事學說を談ずるの外復た一事を交へす將棋圍碁等の娛樂を貪有にあらざるなり吹烟喫茶の慾有に非さるなり然れとも彼の天の美祿に至ては特として鯨飲滿酌仰て快と呼ぶとあり而も態度を失し業務を廢する等のことなし近者偶ま悟る所あり一旦非亞爾箇保兒主義を取るに及ひては斷然巵酒を繼ちて酒杯尙ほ手に觸れす聊か顧みる所なし其果決なる常皆之に類す是を以て一旦其志したる所に於ては半途にして阻絕屈撓する弊なし其素志を遂げて而后止むと云ふ君の醫に於ける能く之を貫きたるも畢竟此志氣の確乎拔くへからさるものあるに基かすんはあらす頗る將來に賴むへきの人とするなり

東八代郡相興村　早川恒祐君

君父を義道と稱す安政六年十一月を以て家に生る狂瀾と號し又浪皷と稱し次に碌々と云ふ幼にして其鄉校に入り普通學を修む稍長ずるに及び學問の小成に安んず可らざるを知り明治八年一月東京に負笈し麹町區士族大久保敢齊に就て漢英兩學を修め尋で牛込區赤城學校の六等訓導に拜命同十一年歸縣して山梨縣五等訓導に拜命し職其鄉校に奉せり然れとも君將來の目的たる醫業に在るを以て其十三年山梨縣々費生

として同縣醫學校に入學す會ま十三年六月　聖上御巡幸の事あり君選拔せられて、天顏に咫尺し進て講す因て賞金を下賜せらる實に君畢生の名譽と謂ふへし君激勵措かす益す目的を將來に達しこれに答ふる所あらんと欲す同十四年再ひ東京に出で神田猿樂町なる陸軍々醫監緒方維準に從ひ又轉じて本鄕湯嶋なる私立醫學專門濟生學舍長長谷川泰に從ひて醫科全科を修め遂に其十一月を以て前期試驗に同二十二年十月を以て後期試驗に及第し尋で內務省より開業免狀を下附せらる是より前君濟生學舍附屬蘇門病院の助手となり頗る名あり會ま本縣日川病院長欽く君乃ち招聘せらる即ち現に奉職する所なり君嘗て在京中公衆衛生に熱心し衛生雜誌發刊の事を畫し松本順、長與專齊、緒方維準、石黑忠悳、大澤謙二、加賀美光賢等諸家の贊成を得たりしか後病を獲て其目的を達する能はざりしは獨り君の不幸なるのみならす蓋し公衆一般の不幸是より大なるものなかるへきなり然れとも君の現職に於ける特に其誠實を悉し殷懃丁寧以て患者に接し患者をして大に便安する所あり以て陰に其年壽を躋せしむ其功誰か之を偉ならすと謂はんや

甲府市太田町　小野實君

君迂仙と號す東莊、春敏等亦其號とする所なり天保九年七月を以て北巨摩郡朝神村の家に生る父を通仙と稱し累代醫を業とす君は其二子父通仙初め漢醫たり天保中家を辭して伊豆に遊ひ三島驛に開業す時に蘭醫肥田春安なる者あり一日通仙其診療に服せしてとあり遂に漢洋優劣のある所を知り就て洋方を學ひ早く已に得る所あり歸國の後其鄕里に開業す君幼にして其勵陶を受け黽勉稍久し安政三年君年十有九歲斷然志を興し業を他國に修めんと欲す聞く京都に廣瀨元恭なる者あり頗る洋醫の術に通せりと是に於て君笈を負て西上し學ふこと四年然れとも學資時に欠乏を告けさるにあらす是を以て君學業の餘暇筆耕を以て欽乏を補ひ千苦萬難漸くにして卒業し歸國を得たり時に安政六年なり當時甲府に幕府譜代の御坊主山田某なる者あり其嗣なきを以て之れが養子となりて山田を冒し醫を業とす既にして維新革命の時來り鎭撫使柳原前光の當國に入るや官祿に衣食するの士は各皆其身上に異動を生し勤王、佐

幕の一に歸せさるを得ざるに至れり君窃かに自ら以爲らく德川に屬せんか王命に違ふの恐れあり王臣たらんか恩德深き德川に背くを奈何せん是に於て君斷然決志籍を平民に編し營を以て自活の計を爲し本姓小野に復したり明治四年本縣病院の設立あるや牧山某院長たり而して之れが助手たるへき者なし顧ふに當時地方に洋醫乏しきを以て君洋醫の術に長せるを以つて舉られて助手となり勤務す其五年牧山氏辭職し代りて院長たる者闕、湯淺の二氏ありしと雖とも尋て亦辭職せり因て君之れが院長代理となる時に明治六年なり翌七年に及て之を辭し同九年に至て再勤し延て其十二年に及へり會ま北巨摩郡日野春村に分病院設立の舉あり君乃ち命せられて之れが院長たり抑も本郡の地たる土地鄙僻人心頑固衛生の何物たるを解せざるのみならす其習慣として病者あるときは獨り醫あるを知て洋醫あるを知らす且漢醫の傍ら窃かに之を助成煽動するあるを以て苟くも洋醫と聞くときは其治術の熟否如何を問はず之を誹謗し之を罵倒するの弊あり治療上殆んと困難を極めたり君赴任以來辛苦經營者て少しも屈せす居ること四年遂に能く其難難に勝ち土人をして漸次其効を感知せしめ病院門前足跡絶ざるに至らしめたるもの其偉功之を君に歸せざるを得す而して君其十五年を以て職を辭し爾來現在の地に開業す君天資温厚にして寡言學博才優庸人と伍するを好ます然れとも曾て之を言動に露はさす且治術の精巧なる自ら求めて售らとるも名聲自然に高く患者其門に充つるに至る君曾て曰く苟くも君たらん者は仁字を以て韋弦とせさる可らすと是を以て急患あるか或は遠路往診にあらさるより未た曾て車馬を要せす步行を以て其常とせり或者詰るに其体裁に欠くるあるを以て君冷笑して曰はす蓋し君の醫に於ける形容を美にし体裁を售るの者流と同一視すへからさるなり

東八代郡富士見村

長田伊佐君

君は醫伯長田泰庵の二子なり電慢と稱し又不賴居士と號す安政六年八月を以て其鄉里即ち現在の地に生る其性たる活潑機敏幼より頗る膽力あり嘗て古八田村某に從て

漢學を修め又家翁に就て漢醫學を修め大に得る所あり當時漢醫尚ほ殘んなり然れとも君窃かに早晩之れか衰滅に歸せんことを察し翻然志を轉して西洋醫學を研究せんと欲し乃ち山梨病院に入學し醫學及ひ獨逸學を專修す時に明治七年なり居ること三年而して當時同學生は君の剛膽不屈の色あるを見て之を暴慢不遜とし頗る嫌忌するの風あり然れとも君毫も意に介せす蓋し同學者中先進を以て自ら許すものあり後輩共に論するに足らすと爲すを以てなり君以爲く學友窓を同しうせんには必らすや已れより先輩者を求めさる可らすと是に於て奮然一起東京に赴き醫科大學別課醫學科に入る實に明治十年十月なり蓋し山梨縣人醫學者中東遊を試み大學に入りたるは君を以て嚆矢とす爾後峽中同學の諸士陸續東上醫科大學に入て卒業したる者尠しとせす焉んぞ君勇奮の舉に敵せられたるに非さるを知らんや乃ち今日山梨に頁醫の輩出したる君間接に力ありと謂ふへきなり既にして數年勉學一日の如く遂に明治十六年二月を以て能く醫科全部を卒業し大學總長の認了証を受け尋て同年月内務省より醫術開業免許証を下附せらる君是に於て歸縣し同年八月甲府私立病院を設立す即ち

曾て縁街にありし新方病院是れなり之を甲府私立病院の權與とす思者尠なからさりしなり君又醫家養成の必要を察し之を實行したる事あり且公私衛生に注意し明治十八年五月中通俗衛生會を創設し及ひ雜誌を發行して衛生の普及を謀り講話會を開きて衛生の必要成を論し或は甲府市街水道の不良を論し極或は縣下各郡村の井水を分析して其改良を謀りたる如き衛生上に於ける用意懇到實に盡せりと謂ふへし且先年「ハルトン」氏の甲府市街水道工事の設計ありたるも要するに君の創意に根原せりと云へり君は又嘗て帝國内に癩病者の逐日增加するの勢あるを歎じ是等患者をして一場に會せしめ其傳播を遏絶豫防するの計を立て先つ第一着手として身延山に一大癩病院を開設せんと欲し之を山僧に謀りたるに山僧も大に其美舉たるを嘉したりしも未た時機の到らさるにや遂に決行せさりしは固とに惜むへしとす既にして君明治二十年八月を以て長野縣東筑摩郡松本有志者の招聘に應して同地に私立病院を創立す即ち私立信陽病院是れなり然り而して同地は醫風甚た宜しからさるを以て君は醫風矯正會及ひ醫事研究會を起し又は衛生會を發企する等運動上頗る熱心の現はれたる

を以て雅俗繁を問わず君の風采を想望する者及ひ患者治を乞ふ者は陸續其門を叩くあるに至れり同二十一年四月松本大火同院亦類燒せるを以て仮院を創設するや君周旋の力勘きにあらざるなり爾後居ること一年有餘時に仝縣下難患病疾者多きを以て君深く之を痛悼し陸軍々醫總監松本順氏を東京より聘し之を治療せしめたるは君が偉績の最なるものにして益す聲譽を博するに至れり然れとも君遂に小規摸に安んするの人にあらす已にして去て出京し各名醫の門を叩て尚ほ益す醫術を研究し後東京糀町に私立病院を設立す惠愛病院即ち是なり而して患者診療の餘暇醫書を著述す亦太た多し著す所、怪我魔設、藥物示要、秤量藥物示要、中毒療法、酒之利害、煙草之利害等あり殊に怪我魔設如きは微妙の玄理を發揮し一朝にして世人の疑團を氷解せしむるに足るものありと云ふ且つ君は常に日本醫設の興らさるを慨し大に此説の興起上に力めたりと聞けり其多年熱心の因ある遂に能く今日の果を修め其門の繁榮を來すに至りたりとなり

南都留郡桂村　川合立玄君

君は長の藩士大林敷充の三男なり周防國佐波郡三田尻に生る敷充武藝に達し弓馬槍劔其他諸般一として通せさるものなし君時に年四五歳常に傍らに在り嘗て一日敷充道場に在り武藝を生徒に敎ふるを見て已に其大畧に通せしと云ふ以て君か敏捷の一斑を窺ふへし君六七歳の時始めて事に學問に從ひたり當時之か朋友たる者皆而立不惑等の人なり獨り其年の我に長するのみならす之と議論し之と難詰する常に其年長者をして服從せしめ或は其請を容れ書史を敎授せし事あり又書を好みて人物山水を描きしに頗る觀るへきものあり其志屹として大人の如しと云ふ已而年十六歳に至り遊學の念禁する能はす乃ち之を父兄に請ひ單身笈を負ひ劔を横へ飄然として家を出つ時に嘉永三年二月なり延て安政四年三月に至る同國阿武郡川根村なる良醫神代恭伯に從て西洋醫術内外科を修めたり君の恭伯の門に在るや刻苦勉勵寸時も怠らす冱寒を厭はす盛暑を避けす深夜睡眠を防かんが爲め板床に居て坐する席を用ひす又鹽

に水を盛て之を傍らに備へ置き睢麾襲來するあれば輒ち目を洗ふに冷水を以てし且つ讀み且つ書す其精神古人股に錐すると異ならざるものあり通常一般人の能く爲し得る所にあらざるなり既にして去て大坂に出て京師に遊ひ更に轉して江戸に出つ其間常に諸名家の門を叩き研磨する所頗る多し君性洸毅身を處する嚴正方直、人に接する遜讓倣らさるを以て到る處之を畏愛し尊敬措かすと云ふ君の山梨縣に來る實に安政四年五月に在り而當時都留郡、郡内に居す其八月惡疫流行の事あり君乃ち起死回生の妙術を盡し患者を既絶に療したる者幾何なるを知らす是を以て聲評日に高く病客門に充つるに至る尋て其五年虎列刺病同地に流行す抑も同病の同地に發したるは之を以て嚆矢とす故に醫家にして其病名を知らさる者比々皆是れなり獨り君其虎列刺病なることを知て之を療し降て文久三年に至り虎列刺痲疹と交々一時に流行す君治療の偉績頗る觀るへきものあり郡内地方其利に賴る者尠しとせす今の桂村に開業したるは實に元治元年なり既にして明治八年十二月山梨縣第二十六種痘區種痘醫拜命同九年四月疫牛撿査擔當醫拜命其十年四月轉して山梨縣立病院九等醫員試補拜命尋て命を同當直醫に拜し又轉して谷村分病院在勤を命せられ其十一年進んて九等醫員拜命、同十二年又進んて八等醫員試補に其十三年八等醫員に拜命し二閲月にして當直醫となる等其本分病院に出入し東西に奔走する終始醫務の繁劇に因らさるはなく其經驗期せすして深く之を得るものあり其療治に於ける何種何病たるを問はすと雖とも内科治殊に漫性諸病を治する如き最も其獨得の長技とする所なり君家號を設け「愛神堂」と云ふ又常に好む所の文字三あり曰く望、曰く愛、曰く信、君常に此三字を服膺し事に處する亦此文字の範圍内に出てすと云ふ以て其人となりを窺ふを得へし醫道の隆昌固とに以ある也

東八代郡石和驛

吉岡順作君

君は東山梨郡岡部村の人なり累世醫を業とす明治十二年山梨縣醫學校に入て醫學を修め同十六年全科並實地手術の研究を遂け其三月卒業証を授與せらる君是に於て益

精神を作興し大に將來に樹立する所あらんを欲し奮然決志去て東京に出て從六位田代基德に從て醫學を修め傍ら濟生學舍に通學す刻苦勵精他に秀出するものあり故を以て功を神速に攸め其十七年九月前期試驗に及第したり是より後君の目的たる專ら實地手術に存するもの〻如く諸病院に就き諸國手を叩く等常に皆實地治療に從ふに非さるはなし明治十九年八月埼玉縣岩槻なる眼科專門醫相良某に從ひ其出張所一切の治療を擔任し治術日に明かなり既にして明治廿年四月に至り後期試驗に及第尋で開業免狀を下附せらる君の素望宿志是に至て達したりと謂ふへし君乃ち其翌月を以て歸鄉開業す患者太た多し君以爲く衛生法の普及を圖らんには一人一個の能く爲し得る所にあらす必らすや團体法に依らすんはあらすと是に於て地方諸醫と謀りて衛生會を創立す爾後同地方衛生の重んすべきを知り漸次普及を致したるは君が鼓舞誘導の力與て多に居ると云ふ君偶ま慮る所あり明治二十一年三月其診察所を西山梨郡甲運村に轉し同二十三年更に又鄉里岡部村に歸て開業し尙ほ患者一般の便利を庶幾し今の石和驛に生春醫院を創設す到る所每に聲譽を博し患者陸續其門に充つと云ふ

君性溫良病客に接する特に懇篤丁寧其治療上に於ける毫も貴賤貧富を問はす能く醫の醫たる所以を知る者と謂ふへきなり

東山梨郡七里村
横田壽一郎

君は神奈川縣武藏國西多摩郡福生村の人なり舊德川氏に祿仕し數世前より八王子千人同心組長たり而して醫は其兼業とする所なり父を甫介と云ふ明治の初年甫介俸祿を返還し民籍に入り爾來醫を以て專業とせり君は其長男たり慶應元年三月を以て其鄉里福生村に生る幼より學を好み稍長して益す奮發し心常に父祖の業を墜さゝらんことを期せり明治十年五月より同十四年十月に至る埼玉縣高麗郡南高麗村の開業醫山崎眞に從ひ專ら醫學並實地手術を研究し尋て其十一月を以て上京し洋學殊に獨逸學修め大學豫備門を經て大學醫學部に入る其間の勉强實に凡ならさるものあり精神殆んと將に金石を貫かんとす會ま母の訃音に接するを以て未た志を得すして歸縣せり是より先き甫介衰老事に堪へさるを以て常に床辱を離れす此に至て又母を喪ふ君

修業上の困難想ふへし君以爲らく今より後家事の繫累必らす少きにあらさるへし而我れ業を大學に修む短くも今後十星霜を經さる可らす今吾れ繫累あるの身を以て或は其入しきに堪へさらんことを恐る試に之を行旅者に譬ふ前途尚ほ數十里あり而して屢纏已に盡き日將に西山に蔭かんとす是れ尋常行歩の能く其目的の地に到着し得へきにあらす方に必らす輕裝急行大道を避け捷路に就かすんはあらす吾が修業に於ける亦斯の如しと是に於て目的一轉大學を去て本鄉湯嶋なる濟生學舍に入り日夜孜々として怠らす越て十六年會ま官、醫業免許規則及試驗規則の改正あり君乃ち其十七年を以て前期試驗を翌十八年を以て後期試驗を完了し仝十九年に至り醫業開業免狀を下附せらるゝに至れり乃ち君や既に隴を得たりと謂ふへきなり然れとも君望蜀の念なきにあらす尚ほ進んて修めんとする所あり是に於て順天堂醫院に入り佐藤醫博士に就て實地外科手術を研究し其他各大醫に就きたる等其得る所頗る多く後歸縣して現在の地に開業し日に名聲を四方に擅にすと云ふ

南都留郡瑞穗村

田邊以節君

一

君安政三年一月を以て家に生る即ち現在の居是なり生れて二歲母を喪ひ後繼母の手に鞠育せらる家世々醫を業とす而して其貧困の故を以て父あるも君の教育に遑あらす君齡八歲に達ひ靜岡縣の一商家に傭食すること前後六年其主人君の商機に敏ならさるを察し之を謝して家に送還す父其遂げさるを怒り又之を某農家に托するを以て君こゝに眠食することまた年あり既にして世態一變明治維新に屬し文運隆盛にして都鄙一般學校の設立あらさるはなし君是に於て嘆息稍久し一日憤然主家を辭して家に歸り父に語るに時勢の如何を以てし且つ學はんと欲すの情を告ぐ父大に之を嘉納し乃ち同閭の漢醫永島元長に就て漢書を學ふことを得たり之を君讀書の始めとす君常に謂らく晩年にして學に入る異常の奮發に非すんは成就すること能はすと既にして明治八年なり君東京に遊學し以て遂に其目的を達せんと欲し父に請ふに此意を以てす聽されす是に於て獨り窃かに行李を理し夜を以て脫出して東京に入る東京に伯

父あり君行て告るに故を以てす亦伯父の譴責に遭ふて此に滯留すること能はす幾何なくして歸鄉せり偶ま父疾病に罹り遂に沒す後、人あり君に伉儷を勸むること屢なり君常に之を辭す蓋し遊學の志勃々挫折せさるものあるを以て之が係累たらんを避くるなり頃焉して君窃かに家財を賣却し其所得の資財を以て一弟養育の資に供し家計畧定るを以て君乃ち單身出京す時に明治九年七月なり君直ちに永島安龍の門に入て醫學を修め後又立志塾村田直景に從て漢醫學を修め又從弟勝山廣宗の醫なるを以て就て醫書を學ひ西修東講未た曾て一日も卷を釋ざるを以て歲月淺きも早く既に得る所あり同十四年三月君出でゝ北海道後志國古宇郡公立病院藥局員となり奉職太た務めたり然れ共君の目的たる此にあらすして早晩大成を期するに在り一時の權義を以て來ると雖とも其精神たる未た嘗て內地勉學の志望を拋擲せさゝなり居ること數月同地の戶長清水某あり君深く之と相結托す清水亦能く君の心事を諒し一時君が學資を擔任するの約あるに至れり君大に喜ひ直ちに職を辭して東京に歸り東京醫學舍「後東亞醫學校へ合併」へ入學したり即ち君將來の目的は之を以て達せんことを期せり何ろ圖らん清水の一朝家產を蕩散し尋て又病沒せんとは君今は猴猻離木鵜鳥失翼其跡を同うし玆に立脚の地を失ひたるを以て日ならすして同校を退きたり時に明治十五年三月なり君是に於て新宮涼園に從ひ或は宮地善春(陸軍二等軍醫正)に或は酒井直一(大學醫學部卒業生)に從て解剖及ひ生理學を修め傍ら實驗說の敎授を受け玆に又一年有餘の艱難を嘗めつゝ大學第二病院外科室に於て橋本大醫の外科治療を施す每に君常に之に隨侍して親しく其實地手術の秘奧を究むることを得たり然れとも君未た以て其目的を達するを得さるなり會ま內務省に於て藥舖開業試驗の擧行あり君乃ち之に應して及第し其免狀を下附せらる然れとも藥舖開業は君が眞の目的にあらさるなり時に東京に藥業の老舖(大坂屋)關惣吉なる者あり然れとも藥舖免狀あるにあらず而して君には乃ち之あり故を以て君之が爲めに雇はるゝことを得たり是れより後君每月若干の資を得るに至れり是に於て君之を學資として直ちに東京醫生醫學校に入る其精神卓として動かず運勉拮据亦凡ならさるを以て始めて大に得る所あり遂に明治二十一年五月を以て前期試驗を同二十二年四月を以て後期試驗を卒へ玆

に能く醫學の全科を大成するに至る君の艱難を嘗めたること誠に此の如し學はんと欲する乎學資なし學はさらんとする乎資産なく職業なし困難此に至て極まると謂ふへし其幸に大成の目的を達するに至りたるは君精神の終始一轍確乎動かさるの致す所なるへし然れとも又安んろ其艱難の甚しき君に激動を與へて遂に克く此の大成を得せしめたるに非さるを知らんや是に由て之を言へは君に艱難を與へたるは即ち君に安樂を與へたるの所以なる乎現在の開業たる患者益す多く名聲愈よ高く家門日に繁榮を致す固より其所なり

南都留郡桂村　高尾章君

君幼名を春江美盛と云ひ又正之輔と稱す世々醫を業とし武田の浪士たり舊姓林後今の姓に改む君の父齊輔幼にして醫道を好み京坂及ひ江戸に修學すること二十有餘年間遂に伊豆三島驛に開業　後歸縣して今の地に開業す君當時尚ほ幼なり文久二年中、田村貞一郎、小佐野大和守等に就て修學稍や解する所あり元治元年五月筱を江戸に負ひ瀧尾景三及ひ小川昇菴に就て西洋醫學を修むること六年既にして明治五年なり其八月より仝七年七月に至る山梨縣病院長關湯淺の兩醫に就て研究す在院三年内外治術共に畧ほ通せさるなきに至れり是に於て去て自村に開業す明治八年種痘醫拜命仝十二年九月本縣病院雇醫員拜命又其十八年自村衛生員を命せらる君患者に接し病門に赴く特に懇切丁寧なるを以て治を乞ふ者日一日其數を増と云ふ

東山梨郡岡部村　辻保順君

君號を盧村と曰ひ又孝盛と號す其名保順は曾祖より累世相承くる所にして君に至り亦之を繼くと曰ふ君年四十一、人と爲り温和にして慈仁人に接して終始渝らす患者に接する殊に悃誠切實なるを以て四方思慕する者日に多く患者易簀の際に當り死は命なり憾むに足らす獨り保順翁の治療を受けざるを是れ憾むのみと曰はしむるに至れりとゞ以て其信切と手術の老練熟達なるとをトすへし君叔父あり曾て和闘院に航

し大醫「シーボルド」に就き醫術を研究し大に自得する所あり歸朝の後開業し遂に克く今の名聲を博せしと云ふ君蓋し旦夕傍らに在り浸染淺からざるものあり以て今日の地を爲したるならん抑も君は機山武田氏の流末なり故に其所藏系圖は當時田原氏の珍とし藏めしを傳へて君に至りたるものにして其古物の珍貴すべきのみならず之を見ては其門藥の鄙しからざるを知り因て益す家聲を汚さゞらんことを期し故を以て愈よ業務に勉むる所あり君書畫を愛し又駝を好み草木百餘種を其庭園に植へ業餘見を以て其意を慰むる如き思想塵外に脫出し頗る君子の風ありと云ふ

南都留郡瑞穗村

永島安龍君

君舊名有恒、字は其行、松園と號す君の祖父を安龍と稱す君後之を繼ぎ今の名に改むと云ふ君性剛直守る所あり曾て人に阿らず氣節自ら重んずるの風あり祖父安龍醫を業とし兼て漢書に涉獵せるを以て君も亦常に勉學の志あり安政四年丁巳會ま參州田原藩儒伊藤鳳山なる者我が甲斐に遊ふあり祖父安龍と同門の故あるを以て之に投せり安龍乃ち君をして之に師事し東修を執らしむ君是に於て就て漢學を修めたり幾何くして負笈、師と共に漫遊の途に上り信濃、越後、出羽等諸州を漫遊す到る所經籍を講し議論を叩くの事にあらざるはなし萬延元年君時年十六師の江戸に歸るに從ひ尙ほ其蒸陶を受く居ること二年去て碩儒安井息軒の門に入り亦漢學を修め勉稍久し然れとも其醫籍の人なるを以て將來の目的たる醫學に存せすんはあらす元治元年舊幕待醫多紀氏の養春院に入り漢醫學を修むること又茲に幾年殘頗る得る所あり殆ど大成に及ひたりと雖とも洋醫學の修業に至ては尙ほ未たしなり既にして鄉里に歸り明治五年甲府病院に入り關寛、湯淺鼎の二院長に從ひ西洋醫學を修め在院甚た永く終始常に實地手術に從ふを以て經驗日に多く其業の熟達凡庸醫流と同日に語る可らさる者あり是に於て漢洋併修共に其良果を得、志望全く達したりと謂ふへし明治九年君舊て東京府下に開業せしに聲評日に高く患者益す多し已而嚴君老ひたるの故を以て歸鄉し現在の地に開業す君剛直の資に藉り淡泊以て人に接す患者の便安蓋し勘

少にあらざるものあり是れ今日の隆盛を致す所以なる乎之を彼の名利を競ひ權豪に阿り苟も其盧名を售らんとする等通常商賈的の營業を爲す庸庵字は竹林なる者に比れは其是非得喪果して如何ろや

北巨摩郡若神子村　中田隆定君

君幼名榮吉と稱し元治元年八月を以て其鄉里穗足村に生る幼にして父を喪ひ後、母の爲めに鞠育せらる君資性温厚沈着然れとも胸中毅然として守る所あり敢て凡俗に拘汲せざるなり其幼時家に在るや毫も日常の些事に齷齪せす齡既に九歲家を出て四方に流寓す其嘗て甲府に在るや小野泉設くる所の私立三同學舍に入て專漢學を修め頗る得る所あり降て明治十三年に至る學風大に興り文物燦然開明の度日に月に進行せんとし君小成に安んす可らさるを知り奮然笈を負て東京に遊學し英學校に入て歐文及語學を修る事凡ろ二年間拮据黽勉手未た曾て一日も卷を釋ず是を以て胸間早く

蘊蓄する所あり既にして鄉里に歸宿し居ること歲餘其家系醫業に屬するを以て君亦之を以て社會に立ち遂に能く父祖の緒業を恢弘せん事を期せり時に明治十五年なり會ま山梨縣病院內醫學講習所に於て生徒募集の事あり君奮然之に應し勵精刻苦心頭復た他事あらざりしなり尋で翌十六年全所の廢止せらるゝや全所衆多の學生中より數名を拔推して新に高等中學醫學部に留學せしむるの制を定められ其撰に當る者あり而て君も亦與れり學ぶこと茲に數年明治二十一年三月を以て全く其業を卒へたり爾後東京に在て本務に服し實地經驗の事甚た多し或は諸大家の門を敲き交接少なからさるを以て聞見隨て淺からす就中內外科眼科の如きは各專門博士佐藤進、井上達也、樫村清德氏等の諸氏に就て實地の蘊奧を究めたり且つ衛生殊に公衆衛生に關しては最も深く注意し之が雜誌發刊の計畫をも爲せしとなり今日現在患者に接するを觀るに赤貧にして難治の症に罹り天壽を全うし克はさる者の爲めには施療して謝儀を要せざる等畢竟醫は仁術たるの名稱に背かざるものあり不日將に大規摸を擴張し私立病院となさんとし目下計畫中なりと聞けり君門を現在の地に張り名聲日に高く

恩者其門に接踵す是れ其素なきにあらざるなり

西山梨郡千塚村　内藤知久君

君は北巨摩郡清哲村の人なり明治六年本村清哲小學に校入り全十二年全科卒業尋て十三年一月十五年一月十五年三月に至り漢數學各專門家に從て修學す君性機敏文學長し書も亦凡俗に脫出す心常に一業を興し卓然立つ所あらんことを期す當時山梨醫學校縣費生募集の擧あり君乃ち之に應し試驗を經て縣費入學の許可を受け理化學並各科を修業し全十六年七月全校廢止に屬せるを以て退校す全九月千葉縣千葉醫學校に於て醫學生を募集するや君又之に應して入學し翌十七年二月を以て第一期試驗に及第せり是より先き山梨醫學校の廢するや尋て醫生學を撰拔し縣費を以て千葉醫學校へ留學せしめたるの事あり是に至り縣廳は君が醫學上實績の調査を爲し遂に縣費を以て千葉留學生中に加へたり君感憤研磨常ならず留學數年全二十一年三月全科卒業し歸縣せり全年六月故ありて學校の敎務に從事し餘暇を以て本縣病院醫務に服し若干の手當を給與せられ後罷めて現在の千塚村に開業す實に二十二年三月なり延て今日に至る治術の長せると經驗の富めると敢て喋々を俟たざるも患者治を乞ふの多きを見て知るべきなり君此に開業するも實に同村有志者の懇請に應したるにて近傍其使に賴る者多く萬口稱賛名聲日に高しと云

東山梨郡松里村　成田敬爾君

君は青森縣の士族なり年二十三、幼にして文學を好み東奥義塾に入りて普通學英學を修め年十二歳の齊公立中學校に入り傍ら儒者工藤守喜に就て漢學を研究し大に熟達したるものあり君以爲らく儒者と爲て文詩に長し博識を極む善は則ち善なりと雖とも之れが實地應用を欠くときは事に於て何の益かあらん若かず醫と爲て實地活物に接し直接に社會一般に便せんにはと是に於て始めて醫學に志し同縣々立醫學校に

入る時に君年十五歳なり翌年其縣費生となり鋭意勉勉須臾も怠らざるなり是を以て上進頗る早く殆んと將に卒業せんとするに至れり已而十八年二月同校廢止したるを以て衆多生徒は半途にして一時皆散亂せり君も亦其一人なり然れとも君が其目的を達せんとするの精神は遂に之を以て奮ふこと能はす同校の廢止に歸するや君直ちに東都遊學の志あり明治十八年四月出京して濟生學舎に入り研磨凡ならざるを以て翌十九年直ちに醫術開業前期試驗に同二十二年其后期試驗に及第し茲に開業免狀を下附せらる蓋し君の目的是に至て始めて達したりと謂ふへし君の同校に在るや孜々勉勵終始一日の如し傍ら順天堂須田哲造其他諸國手の門に遊ひ實地研究せしを以て其結果たる終に大に其身に得る所あり同二十三年本縣故郷なる松里村に來り松里病院を設立する等他の稱賛實に尠少にあらす開業以來患者其門に塡塞日々昌盛に赴くと云ふ

南都留郡谷村監獄支署詰

野呂勉君

君嘉永六年五月を以て今の谷村に生る弱冠に及ひ石川縣加賀國に遊ひ金澤下今町の刀圭家佐藤順三に隨て醫學を修め同五年に至る前後八年間勉勵辛苦寸時も怠らす醫術の大畧は早く既に通せさるなきに至れり君是に於て翌六年を以て神奈川縣横濱に開業し轉して靜岡縣伊豆國下田町に開業す時に明治九年なり翌十年同縣下虎列刺病流行の事あり君擧られて撿疫委員となり頗る偉績あり其十一月同縣より醫術開業免狀を授けられ須臾にして進んで同縣公立第九大區病院當直委員に拜するに至れり然れとも君を以て足れりとせす尋て之を辭し奮然去て東京に至り本郷なる濟生學舎に入て又大に修むる所あり之を明治十三年七月とす會ま山梨縣公立病院醫員缺乏乃ち君を聘して七等委員とし尋て當直醫とし遂に谷村分病院に在勤せしむ既にして明治十六年に至り進んで六等醫員となり同十七年内務省より其履歴に依り開業免狀を授けらる君是に於て職を病院に辭し再ひ東京々橋區靈岸島濱町に開業患者頗る多しと云ふ後二十二年山梨縣下公立谷村病院醫員缺くるを以て君東京を去り、歸て之に補

し當直醫となる既にして本年一月本縣監獄醫となり谷村監獄支署在勤を命せらる即ち君の今日現に奉する所なり始め君の本分病院の間に奉仕するや撿疫委員となり救治甚た勉めたるのみならす平素職務勉勵なるを以て慰勞賞與等の下賜に接せしこと其數を知らす亦榮とすへきなり

中巨摩郡大井村

大久保　盛君

君は祖父を章言、父を黄齋と稱し共に皆醫を業とし傳て君に至る即ち君は醫業開始の第三世なり父黄齋天保年間江戸に在り當時の碩學坪井信道の門に入て原書を研究すること凡そ七年間遂に其塾長を命せらる居ること二年既にして歸鄉す時に天保十二年辛丑四月なり今年八旬尚ほ能く瞿鑠たりと云ふ君の幼なるや常に父翁の傍らに在り日々醫書を講究し治療を目擊し且つ父翁を助けて病客に接し代診調劑の事等に從ひたるを以て其實際に得る所決して淺しとせさるなり明治十二年九月病院醫員に

拜命す會ま拉病流行頗る猖獗を逞す君是に於て命を奉して流行地に出張す尋て同十五年八月撿疫委員に其十月更に地方徽兵醫員に拜す其勉焉として職を奉する常に皆觀るべきの跡あり慰勞褒賞の典に接せしも前後舉くるに勝ふ可らすと云ふ同十七年三月日野春分病院在勤を命せられ之が當直醫たり故を以て同年中内務省より免狀下賜の事あり居る數月轉して睦合分病院詰となり後本院へ復し尋て又日野春分病院へ再轉遂に本院へ復歸し前後醫務に十星霜を重ぬるに至る蓋し一日の閑を得さるなり之を要するに公には病院醫務を裨補し私には君自らの爲めに其治術を發達せしめたること凡そ夫れ幾何ぞや同廿一年解職爾來其自宅に開業す名聲日に高く病客常に室に充つると云ふ

東山梨郡七里村

山下　正策君

君資性朴直邊幅を飾らす心情太だ淡泊なり目するに英材機敏を以てすへからすと雖

とも其强記と耐忍力に富めるとは人皆之を稱し君も亦自ら許す所なり文久三年六月家に生る君の母懷胎中一日土藏に入る產氣俄かに發し君乃ち生る故を以て君の幼なる人皆戯れに之を御藏坊主と呼りとなり明治六年二月君年十一にして其邑里山田仁興の門に入り尋て小學校に轉し傍ら其敎師鈴木重貞に就て漢學及ひ數學を修めたり君師敎を受くる一度必らす之を忘れさるなり是を以て上達頗る早く常に他生を陵駕せり既にして同郡八幡市河學校の助敎となり後自村學校の助敎に轉したり君職に敎育に在りと雖とも心窃かに醫道を學はんと欲するの念あり是に於て去て相興村醫士山田歡に就て醫學を修む時に明治十二年なり之を君醫に入るの始めとす居ること殆んと一年、研磨怠らす師敎亦甚だ懇切なるを以て學業日に進むの勢あり然れとも醫たらんには內務省成規の試驗あり蓋し踰ゆ可らさるの難關たり若かす之れが順路に就かんにはと是に於て徽典館醫學科に入る學ぶこと數年遂に其十六年三月を以て業卒へ家に歸る尋て其五月醫術開業試驗に登第し免狀を下附せらる君益す激勵東遊修學の志勃如禁す可らす是に於て腰纏十圓を調へて出京し他の紹介を以て良醫山川幸喜の塾に入り專ら事に病門の往診に從へり是を以て或は公侯の門に出入し或は大臣の病辱に診斷を試み歸れば師に實地手術に從ひたり如斯すること前後六年なり烏兎匆々既にして十八年四閱月に至る君心中獨り私かに以爲らく實地治術は畧ほ之を得たり願くは進んて尙ほ一層の學力を蓄へん顧ふに今の世能く學問手術を兼ぬる者外科に橋本、內科に佐々木此の兩博士あるのみ然れとも橋本博士には嚮者に質を委せんとして聽されす故を以て佐々木博士に投し意已に決せり而して之が紹介者を求むるに其人なし君乃ち直ちに投し刺を通す往復數回辯說百端懇情縷々として止ます其精神顏面に顯はれ誠實言詞に溢る稍久而後聽さる君の喜ひ而後知るへきなり是より君常に同博士の內科診斷學を學ひ始めて大に其蘊奧を究むることを得たり居ること七閱月已に大ひに得る所あるを以て自から之を實地に施さんと欲し去て自ら本所に開業す病容甚た多し既にして又橋本博士の講筵に列するを得、聽講亦久し尋て牛込に開業し傍ら小兒科萩原三圭に麴町に從て研究す會ま埼玉縣比企郡に私立病院の設立あり醫員を聘せんと君を請ふこと頻りなり君乃ち之れに應し同醫員に列す

實に明治廿一年五月十四日なり爾後數月既にして嚴君疾病の故を以て歸縣し遂に本村千野組に開業し後轉して現在の地に開業す今に至り君が病室日に狹隘に苦しむの狀ある是れ君曩者に克く艱難に耐へたるの因あつて玆に此の果を結ひたるなる乎固より怪しむに足らざるなり

中巨摩郡南湖村

增澤玄民君

君は東京の人なり舊名隆平後今の名に改む父を四明と號し蒜生櫻水翁の門生にして當時の儒流たり東修を執る者千有餘人ありて而して先きに亡す君は其長子なり年十四曾て德川の儒家林祭酒の門に入て朱子學を修め後堀秀成に就て皇典學を講修し兼て和歌を加藤千浪に學ひたり君窃かに以爲らく學者文弱の弊たる古今の通患なり以て深く戒しめずんはある可からすと十八歲に及ひ土屋采女正の藩士某に從て炮術の傳習を受く學ふ所常に其奥旨を究めざるはなし然れとも將來に期するの目的は此二者に非すして醫業に在り居ること一年去て駿河に遊ひ清水湊の良醫松野良平を師とし始めて醫術を修め黽勉拮据數年一日既にして醫道の大要畧ほ通せざるなきに至れるを以て獨立自營醫門を江尻驛に張り漢方施術の傍ら交るに西洋醫術を以てし尚ほ諸國を歷遊して諸大醫の門を叩き實地に研究したるを以て學問經驗と共に深く之を得るものあり末年遂に本縣に來りて今の地に開業し傍ら大久保黃齋に從て尚ほ益す西洋醫學を研究し降て明治十四年本縣公立病院長大橋辰を師とし爾來手術の進みたる顯然蔽ふ可らす同院長の曾て稱賛して措かさる所たり同十八年獸疫檢査醫拜命、同廿一年三月順天堂に醫事研究會の設立あり君進んで之が會員たり能く其名を空しうせす是より先き本縣に於て大に拉病流行の事ある兩次なり十二年十五年是に於て君撰れて公立病院醫員となり專ら事に檢疫に從ひ奉務甚た懇到賞賜尠なからすと云ふ君醫書に精しく經驗に富み加ふるに老練着實なるを以てす照者の多き夫れ之を以てする哉藥室を樂天洞と號す亦以て君の淡泊居客一般に便なるを卜すへきなり

甲府市八日町　丸茂文哉君

君は長野縣上諏訪に生る明治五年より仝地漢醫清水祐碩に就て普通學を修め仝十年始めて醫學に志し洋醫飯田遜を師とし普通醫學を次て私立鶯湖病院に入り又轉して長野縣立松本醫學校兼病院に修學中同校廢せらるゝや山梨縣病院醫學所に來り修學仝十四年同所山梨學校に移さるゝや君俱に之れに從て勉學仝十五年七月醫學全科卒業(君を以て山梨學校醫學部卒業の嚆矢たり)續て同年十二月內務省成規試問に應し成績良好なるを以て翌十六年一月內外科開業免狀を下附せらる爾來檢疫委員に或は地方醫員に拜命する屢々なり然れとも是等瑣事未た以て君を滿足せしむるに足らす同廿年中出京し外科實地治療を順天堂病院長醫學博士佐藤進に內科實地治療を仝副院長醫學士佐藤佐に從て研究年餘大に悟る所あり更に轉して產科婦人科專門に志し仝大家醫學士櫻井郁二郎の門に入り專ら實地施術研究大に熟達して仝廿二年歸峽爾來產科婦人科を專門開業せり將來に期する所の目的は倍々我專門を擴張し傍ら私立產婆學校を設立し完全なる產婆を養成し舊來の產蓐惡習を改良せんことを熱心勉勵す宜哉其門戶の日に盛を極むるや

東八代郡南八代村　前島玄長君

君、父を正親と稱す祖父昌平より醫を業とす君に至て三世なり君文久元年七月を以て家に生る今茲年三十歲性を眞くる沈着寡言、時有て而言ふ必らす言ふへきの要あり時有て而して笑ふ必らす笑ふへきの事あり一物に接し一事を行はんとす先つ再三再四默考之を久し而後之を處す故に其行爲常に正當を得て事理錯誤の弊あらざるなり君嘗て曰く醫は業の至難なるものなり何となれば衆多生命の繫る所にして一匕藥石を誤まるときは獨り自家營業の衰頹を招くのみならす他の生命を誤まるの罪實に淺からすとす恐れ且つ愼まずんはある可らす予父祖の業を繼ぎ將來其門を高うせんとせは因循苟且の能く學び得る所にあらさるなりと是に於て斷然決志明治十二年六

月行李を理し笈を東京に負ひ大學醫學部に入て別課醫學科を修め全十六年十二月に至る前後數年而して解剖學、組織學、生理學、外科學、病理學、藥劑學、眼科、産科、外科病床實驗、內科病床實驗等備く其修むる所にして遂に能く之が卒業證書を受領するに至れり時に明治十七年二月十六日なり尋て三月醫術開業免狀を領せらる其黽勉辛苦想ふへし當時千葉縣下總國海上郡に私立銚子病院會ま院長欠く君乃ち聘せられて之に補す大に名聲あり患者益す多し既にして之を辭して歸縣し明治十九年一月より今の地に開業し四方其便に賴ると云ふ

北都留郡七保村

小泉景義君

君安政五年正月を以て家に生る資性温厚慈仁、人を愛し貧を救ふ又忍耐不撓の氣象あり父を誠哉と稱す世々醫業たり君不幸幼にして父母を喪ふ家亦甚だ豐ならす君爲めに益す激勵先人の業を襲ぎ家を興さんと欲するのみ復た餘念あらさりし既して大に得る所あり明治十二年十月山梨縣病院雇醫員に拜命谷村病院在勤となり後十等醫員に尋て九等醫員試補に昇進し遂に十五年八月本縣醫術開業免狀を授けらる後進んて九等醫員谷村分病院當直醫となる其間拉病流行の事あれは之れが撿疫委員として各地に奔命し到る所常に其職を曠しうせす且つ平生職務勉勵等の故を以て慰勞賞與等下賜の金額尠きにあらさるなり然れとも君、醫は獨立自營にあらざれは自然患者に對するの弊害尠なからさるを察したるものゝ如し是に於て斷然職を辭し其自村に開業す時に明治十六年六月五日なり同十七年四月內務省醫術內外科免狀を授けらる爾來汲々治術を研究すること日あり患者に接する懇篤丁寧なるを以て名聲四方に高く治を乞ふ者日に其門に充つるに至る然れとも君の自村たる一隅に僻在するを以て醫療未だ充分に普及し能はざるの憾みなしとせす殊に明治十九年虎列刺病流行の兆あるを以て猿橋驛及ひ賑岡村に出張所を設置し醫員を招聘して之れが醫療に服せしめ君は自ら回診の事に勉めたり當時病勢の漸く削弱したるは君か處置其時宜に適したるに因ると云ふ醫は仁術なり君其信切を以て加ふるに治術の長せるを以てす其

日に信用を厚うする故ある哉

中巨摩郡龍王村　小池勝君

君は北巨摩郡神山村の人なり文久元年七月を以て生る父を山寺義遵と云君は其次男なり幼名を友三郎と稱す又觀水と云後龍王村小池某に養はる因て小池を姓とし後又今の名に改むとなり明治八年より同十年に至る山梨縣師範學校に在りて普通學を修め其黽勉と上進と大に他に傑出せるものあり然れとも君の素望たる各地諸大家を叩き其蘊奥を極めんとするにあり明治十年始めて笈を東京に負ひ決然醫學に志す後ち去りて横濱に出て醫家小澤良濟、近藤良蕉等の門に遊ひ又同湊十全病院に入り其教師米人「シモンス」氏に親炙して内外科の實地を研究する殆んと二年須臾にして同湊巡査病院醫員となり后又轉して再ひ東京に出て佐藤、井上、長谷川等の大家に就て内外、眼、産等の諸科を研究する玆に年あり既にして大に得る所あるを以て去りて千葉

縣南總に遊ひ二三同志と謀り私立病院を設立し之か治療に從事す時に明治十四年なり同十五年を以て歸鄉す會ま虎列拉病流行の事あり君直ちに命を受て檢疫醫となり山梨縣病院の醫員たり既にして其十六年五月を以て内務省成規の試驗に應し開業免狀を授與せらる君多年の勤勞是に於て稍々其効果を得たりと謂ふへき乎明治十八年山梨縣獸疫檢査醫員を命せらる同二十年君日本赤十字社に同盟して仝社正社員に列せられ同二十一年十月を以て同社より章表を贈與せられ併に佩用するを許さる誠とに其榮とする所なり爾來君自宅に在りて開業し專ら濟衆の事に盡力せり同二十二年山梨醫會の起るあり即ち其會員となり大に周旋する所あり君平素衛生に志す篤く赤た郡下に本會の設置なきを恙ひ二三同志と謀り大に計畫する所ありて明治二十四年七月を以て其發會式を擧行するに至る是君の盡力の致す所又以て其榮とする所なり君は獨り治術に長するのみならす兼て又才學に長するものあり且治療上に於ける極めて淡泊を以て患者に接す蓋し患者の之を希望する者亦尠しとせす故を以て名望日一日に加り遂に克く今日の繁盛を致せりと云ふ

甲府市泉町　遠藤寛君

君は舊宮城縣仙臺藩士なり家世々醫を業とす嘉永三年八月を以て生る君資性純良事を爲す甚た着實幼より夙とに有爲の志を齎らし氣槩頗る嘉すへきものあり安政三年一月より宮城縣仙臺養賢堂に於て普通學を修め延て文久二年十二月に至る七年一日終始怠らす故を以て稍得る所あり堂員中優等者を數ふるときは君常に僂指の先に居さるなしと云ふ然れとも家系醫業なるを以て心深く父祖の業を興さんとするに在り同三年二月より慶應三年一月に至る數年間宮城縣醫學校教頭原玄杏に師事し後去て東京に出て舊德川藩醫石川良信に從ひ或は靜岡病院に入り或は同縣下醫師伴野貢に從ひ醫學內外科を修む其間歷遊奔馳辛勞一日にあらす而して遂に其初志を改めす益進み益勉む時に明治六年なり越て七年十月靜岡縣に於て命を徵兵下檢査員に拜し頗る勉めたり時に本縣南巨摩郡に義立病院あり君聘せられて醫員に列せり抑も君の本縣に入る之を以て始めとす仝九年に至り山梨縣病院七等醫員に拜命し睦合分病院に在勤尋て當直醫となり既して進んて仝院々長となり治術日に精に稱揚隨て熾んに內務省より內外科免狀を下附せらる實に明治十二年一月とす是に至て君か素望始めて達したりと謂ふへし蓋し年を積む二十有餘其間昇級及ひ慰勞賞典等の光榮を得、恩露に浴せし事凡幾回なるや盡く記す可らさるなり後又轉して本院に勤務し須臾にして當直醫となり尙ほ檢疫委員に山梨地方徵兵檢査醫員に又同地方徵兵醫員拜命頻と公務の繁劇なる是れ實に君か經驗を富ましむるの基礎にして君名聲の發揚益す加ふるものあり君か後日の地を爲す其れ此に基すと謂ふへき乎君既に充分の地を爲せり是に於て自立して益す規摸を擴張せんとし明治十五年三月辭職して同年六月現在の地に開業し今日の隆盛を見るに至れりとぞ

西山梨郡山城村
七十八番地

雨宮文亮君

君は西山梨郡山城村(舊上今井組)の人なり父を保と曰ひ家世々農を業とす君は其三男なり天資剛毅頗る耐忍の氣象に富めり齡八歳に迨ひ學ふ所あらんと欲す時に部内に學舍あり君乃ち就て學へり蓋し通常讀書習字の課業に過さるのみを君か修學の始めとす後轉して他の私塾に入り漢籍其他普通學を修むること凡そ三年大に得る所あり君嘗て謂へらく學問なるもの徒に文字を知り章句を諳するもの益は則ち益なりと雖とも抑も末なり苟も事に學に從はすとせは務めて實際應用を圖りこれか活用を爲さすんはある可らす而して活用を爲し直接に社會に効益を與ふるもの其事業尠少ならすと雖も顧ふに其最も顯著なるは醫に若くものなしと一日父兄に語るに之を以てす父兄も亦大に其志望を賛し協議頓に決定せり是に於て汎く四方に師を求め其門を叩かんと欲す時に中巨摩郡鎌田邑に漢方醫櫻林保格なる者あり治術精錬名聲噴甚君乃ち奮て其門に入る時に明治八年十二月君十三歳の時なり君是れより終始怠らす理を醫書に求め術を實地に究む如斯すること四年間既にして胸中の蘊奥勃々手術に發

出し技量大に觀るへきものあり爾後師常に代診を爲さしむるに一回の誤診なし偶ま二三無比の奇患者あり師亦皆之を試驗せしむ君立ろに之を辨し治療其方を誤らず是を以て師常に賞賞して措かすと云幾許なくして世潮變遷漢衰洋盛世の醫を視る洋醫にあらされは醫にして醫にあらすと言ふものゝ如し獨り民間の信否如斯なるのみならず官亦大に洋方を奬勵し當時徴典館教科中にも醫學の一科を設け洋醫學を授くるに至れり君乃ち師を辭して同館醫學部に入り日夜勵精怠らす居る數年遂に能く醫學全科を卒業す然れとも君小成に安んせさるなり尋て出京し京橋區采女町開業醫隈川宗悅に就て實地治療を研究し旁ら學術を濟生學舍に修め或は順天堂に通學して外科治術並學理等國手佐藤氏の直接教示を受くる所あり發明甚た尠なからさるなり明治十六年十一月内務省醫術開業試驗に及第し内外科醫術開業免狀を下附せらる君永年の志望是に至て貫徹すと謂ふへし同年十二月有志共立東京府病院（今の東京府慈惠病院）に轉勤し同十七年二三同志と芝區源助町に救生醫院を設け翌十八年二月神奈川縣下八王子驛なる私立八王子病院醫員に列し同年四月再ひ出京して佐々木東洋の

門に入る前後の經歷中到る處常に醫務に從ひ終始研磨の念を離れず是を以て治療の發明日進月歩層一層を加ふるに至れり明治十九年五月歸縣し甲府太田町に於て醫術開業す患者尠なからざるなり同年八月虎病の南都留郡に發するや君撿疫醫員に拜命し同郡瑞穗、福地、桂、谷等の各村に滯在して專ら其事務に執掌し頗る務めたり翌二十年四月甲府和田平町に開業す患者治を乞ふ者夥者太田町開業の時に減せすと云へり後都合を以て其居村に開業す即ち今日の現狀是なり君舊名辰次郎後今の名に改むと云

甲府市三日町

齊藤國一郎君

君本姓中山甲府市三日町醫師亡中山量信の弟齊藤は後に改むる所なり君文久二年七月を以て其本貫北巨摩郡武里村に生る幼にして穎敏頗る漢洋の書に通す曾て自ら以爲く世間幾多の事業中凡ろ人に仁するの事業にして直接に其効益の著顯なるもの刀

圭の業に若くものなしと是に於て斷然決志笈を負て東上し濟生學舍に入て研究す時に明治十四年なり君の機敏なる加ふるに金石透徹の精神を以てし黽勉熄まざるを以て學ふこと幾何なくして大に得る所あり名聲頓に赫々たり其十六年神奈川縣の地方徴兵委員を命せられ延て十七年に至る既にして二十年五月に至り內務省の成規に隨ひて前期試驗に其十月を以て後期試驗に及第す仝年十二月より横濱に開業す同地の風習たる優勝劣敗の風最も甚たしく劣なる者一日も其生を聊んする能はざるなり君此地に開業し殊に良醫多き中に於て大に聲望を博し病客群集門前殆んと市を爲すに至れり然れとも事情許さゝる所あり仝二十二年八月を以て歸縣し現在の所に開業す

東山梨郡八幡村

菊島七藏君

君か父を多郎兵衛と云ふ、農を以て職とす、君は其嫡子なり、多郎兵衛君他に子なし、故に甚た君を鍾愛す君亦能く幼少にして父母に奉事し、且敏にして夙に鄉學を

卒へ、同齢輩の間に在て、崭然頭角を顯はせり、十六歳に及ひ、青雲の志頻なり、將に大に心志を學術に專らにせんとす、偶々肺患に罹り、殆んと至苦を嘗む、蓋其始や、小量の褐色痰を咯出するのみにて、體軀に異狀なし、故に別段意に介せさりき、一日父君咯痰を認め、驚異して曰く、是れ等閑に附去るへからすと、直ちに君を誘ふて醫診を乞はしむ、醫告ぐるに肺患を以てす、而して藥石遂に著効を見す、憂悶徐く加はる、於是乎、君亦驚愕百事を擱き、一意病苦を省し、數醫の歷診を經僅に愈ゆ、誠に滑稽と云ふへし、然れとも經過四年に彌り、莫大の金貨を浪費せしのみならす、一家の憂慮思ふへきのみ、治後君偏に體軀の貴重なる所以と、病患の最も恐るへきことを語ると雖ども如何せん未た其病理の何たるを知らす、嗚呼世間病苦に惱めるもの何ろ限あらん、余親しく其苦を嘗め、其狀を知る、之れより病理を究めは、一は以て一身を保ち、父母を安し一は以て博く世間病苦に難める者を救ふに足らんと、之を父君に計る、父君固と他業に就かしめんとす、然れとも君の言を聞て一點の否辭なく、即時快諾せり、是れ君が鐵石心を以て、事に醫術に從ひた

る基原なりとす

君が醫術上に於ける經歷を聞くに、明治十五年一月山梨縣立乙種醫學校に入り、居る二年弱にして同校所定の理化試問を卒へ、進て醫學の奥義を修めんとせしに不幸醫學校費は縣會の否決する所となり、校舍廢止せられ、意を果さずして退引せり、然れとも是れ豈に屈撓するに足らんや、十七年八月笈を負て鄉里を辭し、東京醫學專問學校に入り、先つ動物、植物、理化、解剖、組織、生理等諸學の教授を受け、課業の餘暇には同窓相謀て一の研究會を設け、醫學上の難義を審問討究し、彼此得る處あり、十八年十月東京に於て醫術開業前期試驗に及第せしを以て、益々精勵心を惹起し、同年十一月より更に病理、內科、外科、藥物、眼科、産科、診斷、婦人科、小兒科、裁判醫學、衛生學、顯微鏡學、並に臨床實驗等諸學の授業を受け、漸くにして業殆んと成る、依て直ちに後期試驗を願出てんとせしも、試驗期あり、折柄其期にあらす、故に一旦歸縣暫く其期を待つに如かすと、即ち歸縣其期を待てり、歸縣すれは舊知便を云ふ、甲府監獄醫局欠員ありと、依て同局詰員拜命、專ら主療醫を助け、且數百

名の患者に接し、實地經驗する一閲年なり、此間頗る得る所なきにあらずと雖とも復た學術及手術上猶ほ不足する點を悟ることも決して少しとせず、嗚呼余今日にして獨立開業したらんには、其能く後期の試驗上に於て、善美の及第を得るとするも焉ぞ完全なる門戸を張るに足らんや、飲如なる哉、危殆なる哉と、仍て斷然職を辭し、二十年三月再び上京更に前掲諸學の研究に從事せり、然るに學校内の教は學理は十分なれとも、臨床實驗は十分ならす、顧ふに學理と實驗とは並修せさる可らすと、仍て餘暇順天堂病院長佐藤進先生の門に入り、洽く先生の施術せる外科患者、臨床實驗並に手術等を親驗せんこと無慮數千人の多に達せり、又同病院副院長佐藤佐先生に隨ひ、數多の内科患者を診し、大に得る所あり、二十年七月更に轉して山龍堂病院長樫村清德先生に就き數百の内科患者に接し又臨床講義を聞き益修得する所多し、九月同僚諸氏と醫學研究會を設立し、醫術の蘊奥を討究せり、十一月同地に於て屑く後期試驗に及第せり、此時に及ては最早自得する處多けれとも、隴を得て蜀を望むは人情の常なり、況んや一匕を誤るときは其影響する處少からさるに於

てをや、乃ち屈せす京地に止り、研究に怠らす、二十一年夏に及て斷然歸縣、鄉里八幡村に於て、始て獨立開業せりと云ふ、

始め君の俄然醫學に志せるや、知人其目的の敎員又は官吏にあらさるを以て概ね之を怪み、其目的を達し歸鄉に際し、亦た其學の速成を疑ひたり、然れは君は出るに怪まれ、入るに疑はれたるものなり、然れとも是等は全く君の深志を悟らさるものにて、今日一般醫を重するの時に遭遇、前きに君の目的の、彼にあらすして此に在しは、寧ろ其先見に服すへきのみ、且速成を疑へるは、昨今退京の新醫家中には、間に口舌に豐にして其術に飲如たるものあるを以て、無理ならぬ事柄なれとも、抑も君の如きは確乎期する所あり、其勵精用意共に凡俗の上に出つ、故に速成に疑を用ゐす却て其敏捷を稱すへきなり、是れ獨立開業の後に至て、月に年に、遠近診斷を寛むるものゝ增加し、芳名の漸く隆ならんとするを以て證するに足る、然而して君自らに於ては猶ほ玆に安せす餘暇あれは必らす醫書を繙き、新說を漏さす、致々として休まず、是れ君獨占の識見なり、人或は之を譏んも余は却て其可を見るなり

旁君の如きは將來最も屬望すべきの醫伯と謂つべきなり

北巨摩郡河原部村　島津庄太郎君

君は北巨摩郡龍岡村の人なり本姓淺川、父を吉隆と曰ふ君は其六男なり文久元年四月生る後同郡穴山村島津壽安の養子となり其家を嗣ぐ因て島津を稱す現在の居は乃ち寄留なり君明治七年中巨摩郡大井村醫師大久保黃齋に從て蘭學及和漢學を修む翌八年山梨縣病院附屬醫學校に入り教員渡忠純に就て獨逸學を修む願ふに前後僅かに數年日月甚た淺しと雖とも黽勉拮据須更も怠らさるを以て既修の書は畧ほ其大意に通せさるなしといふ君心中嘗て大成を期する所あり是に至て躍然一起去て東京に出て本鄕區獨逸學校並修德舍に入りて獨逸學及ひ和漢學算術等の諸學科を修む時に明治十二年なり尋て十五年五月に至り進で醫科大學別課に入り順次修學する所甚た多し試みに其學科及ひ教師等を擧くれは動物學、植物學には大學講師錬木喜三、物理學には大學助教授飯盛挺造解剖學及ひ其實地手術には大學教授田口和美、仝助教授今田東、人体組織學には仝田口和美、無機化學、有機化學には仝助教授丹波敬三、下山順一郎、生理學には仝教授永松東海、內科病理學には醫科大學長醫學博士三宅秀、外科學には陸軍一等軍醫正大學教授足立寛、皮膚病及ひ梅毒病には仝教授花岡員說、藥劑學並處方學、調劑學には大學藥局長草野玄洋、外科器機學並繃帶學には仝助教授片山芳林、眼科學並其實地手術には仝助教授須田鐵三、產科學並婦人科には仝助教授櫻井郁次郎等の諸氏あり又裁判醫學、衛生學を仝助教授片山國嘉に內外科實地手術を仝教授樫村清德、花岡員說、陸軍々醫總監故大學教授橋本綱　故大學教授醫學博士佐藤進の諸氏に學ひたり科目も亦た夥しと謂ふへし而して能く全科を卒業す君が精神の剛毅なる氣象の卓乎たるを以てトすべく君が治術の巧妙なる經驗の富足なるを以て察すべし君姓活潑にして淡泊なり腕車乘馬等の煩を好まず往診には常に徒行すと云ふ君聲譽日々高く病室狹隘に苦しむ亦た以なきにあらさるなり

甲府市百石町

菊池元吉君

君は元仙臺藩士菊池某の二男なり嘉永元年十一月を以て城北廿五番邸に生る年十歳始めて學に就き同藩士白石良能の門に入り後又養賢堂に入て學へり時に君年十五歳なり會ま其母病床に就けり君の資性孱弱にして武術に堪へざるを以て平生苦慮止む能はず其質を易ふるに及んてや君を親戚なる醫家某に托し而後終焉たり是れ君が醫門に入るの始めにして當時漢法啞科を修めたり時に天下騷擾尊攘の論四方に囂々慷慨の士其身を殺し以て大義を唱ふる者尠なからす君年少鋭氣單匹を弄するを以て快しとせす且つ朋友に恥るの念あり醫を辭せんとすること屢なり良能之を戒しめて曰く古語に曰すや良將たらすんは良醫たれと醫道其妙を極め以て天下を經營する何の恥かあらん且つ之を廢すれは亡母の遺志に背くを奈何せんと誨諭懇到君復た言ふ能はす是に於て斷然決志遂に舊て同藩醫學舘に寄宿せり爾來頗る心を醫道に傾け未だ曾て一日も卷を釋てさるなり故を以て進歩甚た早く翌春寮長に擢てられ尋て其筆頭に擧らる一日君卷を掩ふて慨然たり其意何ろや他なし彼の素靈難及ひ金匱傷寒論の

如き其の唐宋以降の註釋を閲するに五行配當に相生相冠の臆想たる空談浮説に過きす絶て其實用に適せさるを以て嘆息したるなり然れとも傷寒論一科の如きは皇朝諸大家の説を觀るに議論醇正陰陽五行の理に偏僻せす却て唐宋諸家未發の卓見を具し遙かに優るあるを覺へり然則ち之を以て足れりとせんか曰く否該一科に賴て以て司命の重任を負はんとす抑も危道と謂ふへし一日赤馬關獨嘯菴の遺書を繙て大に曉る所あり是より後寮則外窃かに半夜の燈を剔り泰西醫の翻譯書を閲し潛心刻苦大に開發する所あり既にして戊辰革命の運に際會し藩、兵士を徴發〻軍役に赴かしむ君亦其中に在り藩命辭するを得す是に於て筆硯を投し戎軒に從へり既にして戰罷み歸藩す君爾後碌々爲す所あらす僅かに舊卷遺編を繙くこと數閲月延て明治の初年藩新たに病院及ひ醫學校を設立し教師には熊本縣人村上辰次なる者を聘用せり君乃ち之に從て洋法内外科及ひ英書を學ひ傍ら病院に通學して實地治療を研究す居ること一年後教師の去るに及ひ君亦尋て出京し大槻磐溪翁の塾に入り後又た陸軍々醫監石川良信翁の塾に轉せり翁一日君に謂て曰く泰西醫祖依卜加得氏云へることあり醫は自然

の良能の臣僕なり此語汝ち終生之を服膺せよと君大に之に服せり君か現在の雅號に自然の字を冠するは之に因するなり君在京中終始順天堂に出入して村上氏の蒸陶に接し或は又老師尙中翁の講筵に待する等造次顚沛も醫事の講究にあらさるはなし時に明治八年本縣病院醫員欠乏す君乃ち聘用せられ幾何なくして副當直醫に尋て當直醫に榮進せり及ひ疫牛撙當撿疫委員に衛生課御用掛に地方徵兵委員に歷々連務し竭す所甚た多し同十六年に至り職を辭して現在の所に開業するに至れり然れとも君未た以て足れりとせす益す進んて內務省成規の試驗に應し卒業せり君の治術に於ける頗る博涉を極め殊に呼吸器病、消化器病及ひ啞科の如きは最も其長する所なり病客の就て治を乞ふと往診と君の身內外に繁忙未た一日の安居を得す然れとも從容とし て餘裕あり性疎放邊幅を修めす耶蘇新教を奉し世に阿諛するを喜ます常に古人の詩文を誦し人と語るや話柄每に名利の外に出つ醫流中一種高潔の人と謂ふへし

南都留郡谷村公立分病院長、

本村博長君

君は長崎縣北高來郡諫早村の人なり慶應元年四月より明治三年九月に至る凡そ六年間元佐賀藩好生舘に入て醫學を修め一意黽勉寧時も怠らさるを以て幾何なくして醫學卒業試驗を遂け開業を許さる君益進んて究むる所あらんと欲し同年十月より其五年七月に至る大坂病院外國教師アルメレンス氏に就て醫術內外科傳習を受け大に得る所あり是に於て大坂鎭臺病院に出仕し尋て其翌年軍醫寮出仕に補して大坂鎭臺に出張し居ること數年既して之を罷め山梨縣病院一等醫員に拜命尋て又當直醫となり醫學助教を兼ね後等級改定の事あるに方り更に同院五等醫員試補に拜せり明治十年中山梨縣病院新築の事あるや君の周旋盡力勘なからす且つ新築費中へ獻金したるの故を以て木盃を下賜せられ後又進んで五等醫員に拜命し其十一年遂に內務省より醫術開業免狀を下賜せらる是より「大坂鎭臺に在りて步兵十九番大隊熊本鎭臺直轄となれり其隊附醫官なるを以て護送して彼地に赴けり」前後幾回彼の佐賀暴動の際の如き砲兵隊醫官にて戰地へ出張せし等其經歷頗る凡ならす是より後山梨縣病院三等

醫員と爲て副院長に拜命し又轉して谷村病院長に拜命し一等醫員となる或は本院長の代理に心得に或は地方衛生會委員に或は檢疫委員に命に醫務に奔りたること蓋し枚舉に遑あらす隨て醫術の層一層に精熟し年一年に實地經驗に富めること言を俟たさる所なり而して君性謹厚終始一心翼々として務めに從ふを以て信用益す深く職務勉勵の爲め慰勞賞與等の恩賜に接せしも亦其幾回なるを知らさるなり降て明治廿二年四月谷村分病院の廢するや君隨て共に廢職し手當金貳百圓を下賜せらる爾後同院は公立となり君尚ほ之か院長たること即ち今日の如くなり畢竟全院の能く其全郡に重んせられて日々盛大を致し全郡人民か擧て其性命を此に托せんとするもの即ち君あるを以ての故なりと云ふ

甲府市新柳町

平田房平君

君嘗きに大學醫學部に入て卒業し歸り來て今の地に開業す名聲噴々病客其門に群集す未た曾て一匕を誤らす他の衛生上に與へたるの効益夫れ幾何ぞや君性温厚にして寡言人其履歴を問ふも答へす故を以て其詳細を知る者なし唯た醫道熟達の人をたゝて稱するのみ之を氷に譬ふるに喋々として語るものは小河の如く其水底の淺深を知へく默々として言はざるものは淵の如し君の度量と學識と及ひ醫術の經驗と其深きこと其れ尚ほ淵底の若々として窺ふ可らさる如き乎

甲府市代官町

醫學士　下平用彩君

君は和歌山縣東牟婁郡新宮町の人にして其籍平民に在り文久三年五月を以て其鄕里に生る幼にして穎敏喜んで書史を讀む博渉强記苟くも一讀したるもの遺忘せす聞く者感せさるはあらさりしとなり後醫學を修むるに及ひ和洋の書に通せさるものなし是に於て君益す奮發して出京し東京大學醫學部に入り黽勉刻苦夜以て日に繼くに至る如斯すること幾年未た嘗て一日も怠らす克く大學を卒業し尋て助手と爲り遂に本

縣病院長の榮進を見るに至れり君履歴の觀るへきもの頗る多しと聞く然とも人之を問へは笑て答へす故を以て人其詳密を知るものなし是れ院長の院長たる所以、芙蓉の群巒中に挺然直立するものならん乎其治術の巧妙と臨院已來の名聲とは之を病院近者の繁忙に察すへきなり君翻譯する所診斷學、産科學、婦人科學、外科學等ありて頗る世に行はれり

南巨摩郡增穗村

新海宗四郎君

君は中巨摩郡玉幡村八幡組の人なり文久三亥年を以て其鄕に生る父を藤兵衛と稱す君は其四男なり明治十四年中名古屋高丈町なる醫士永井信行に就て醫學を研究せしか家事立法上の都合を以て歸峽す其翌十五年復ひ奮發して出京し濟生學舍長谷川泰に就て大に研究する所あり會ま山梨縣病院醫員聘用の事あり君乃ち歸峽して之れが雇醫となる時に明治十六年なり其翌十七年再ひ出京し內務省成規の試驗を經て前期を卒業し同年十二月又本縣病院に入る雇醫員たること前の如く然れとも君小成に安んせす其十八年職を辭し十九年三月に至て遂に克後期試驗に卒業し壽て免狀を下附せらる同年中谷村分病院猿橋出張所の主任醫となる後之を辭して上京し順天堂に入て內外科實地を研究す後歸縣して現在の所に開業す時に明治二十一年なり君資性溫厚人者に接する誠實懇到而して加ふるに前掲經歷の多く治術の精熟なるを以てす是れ今日病室の狹隘を告くる所以なり

東山梨郡八幡村

杉田保光君

君通稱玄丘、幼名を米甫と稱す後今の諱を用ふ歷世醫を業とし頗る舊家たり其遠祖久直より傳へて君に至る連綿十三世皆醫を以て顯はる父を照直と曰ふ既に亡す時に君九歲なり尙ほ童心と雖とも胸中自ら操持ずる所あり常に窃かに父祖の緖業を墜さゞらんことを期せり嘉永三年十一月より八代郡一の宮村古屋周齊に從て學ひ後轉し

て同郡末木村醫師志村敏丘の塾に入て醫學を修め鋭意專心復た他事を顧りみざりしなり故を以て醫道の大体は畧ほ通曉せさるなきに至れり君乃ち益す奮發し安政二年三月を以て江戸に至り淺草なる良醫堀田原、雨宮某等に就て又醫學を修むること茲に年あり是に於て醫業大に進み同五年二月歸甲し其自宅に開業す既にして維新革命の事あり明治三年三月に至る會ま甲府市内に公立病院創立の設計あり君乃ち同志者と相謀りて之か率先者となり周旋頗る盡くせり且つ自ら創立費中へ献資したる等其偉績大に他に超越したるものあり既にして翌年三月同院新築の功成る君乃ち進んで之に入り院長牧山思長に從て種痘術を修め尋で關寛に就て洋醫術を學ひ内外科を兼修す以隆今日に至る歳月の久しき終始一日の如く孳々研究せるを以て學問上達加ふあに治術の老練なるを以てす復た問然すへきものあらさるなり君の病院に在るや山梨縣廳より内外科醫術開業の許可あり尋て内務省より開業免狀を授與せらる其業務の昌盛今日の如くなる是れ其父祖の緒業を繼承し克く遂に其目的を達したるものと謂ふへきなり

東山梨郡平等村　須田逸策君

君は東八代郡鴉飼村の産なり父を海藏と稱し歴世醫を業とす君の幼なるや海藏に從ひ漢法醫學を修め明治五年より其六年に至る本縣病院長關寛に從て洋法内科醫術を修めたり未た幾何ならすして所得甚た淺からさるものありしは蓋し君材識博宏の所致なる乎君同年中本縣病院十等醫員に拜命其七年更に進んて九等醫員となり醫務頗る繁劇を極む是を以て不知不識の間に於て君醫療の巧妙已に人口に上るものあり君嘗て窃かに以爲らく醫は仁術なり其職務の爲めに病門に奔らんよりは若かす寧ろ獨立自營思者に接するの愈よ益す信切丁寧ならんにはと是に於て職を辭し其本貫鴉飼村に開業す時に明治九年八月なり然れとも君之を以て自ら足れりと爲さす尚ほ進んて實地治術を究めんと欲するの意あり復ひ病院に入り洋法内科醫術々修め忽にして同院十等醫員に列し尋で谷村分病院に在勤す後又本院に或は睦合分院に轉勤數次遂

に昇て九等醫員となる其業の繁劇なる嘗て一日の倦色なく頗る勤めたる所あり其間勤功慰勞等の故を以て賞與下賜の事屢々なり後又職を辭し現在の地に開業せり是より先き鴉飼村に開業するや患者甚た多し而して現在の患者は之に倍ずるに至る君の治術に於ける內科術は其專門とする所にして殊に老練を極むるとなり

元山梨縣病院當直醫　鈴木憲君

君は中巨摩郡小井川村の人なり安政六年三月家に生る幼名謙三、秦蘿と號す君の父昇氏夙に學事に志し村內に私塾を設け名けて維新義塾と稱し衆多子弟に漢學を教授し銳意董陶に從事せしを以て子弟の教を受くる者多く學風大に開け村民之れか德化に歸する者尠なからす如斯數年無賴の子弟も漸次跡を收め遂に學事の忽かせにす可らざるを知るに至る其世教に裨補したること凡ろ夫れ幾許ろや君傍らに在り亦共に漢學を修む既にして君年十三歲誦讀の餘衆多塾生の詩文等を蒐集し上梓して文園集

と云ひ之を塾生及ひ遠近の子弟に頒與せし等風流の思想早く既に掬すへきものあり後官小學校設立の令を布かるゝや君出て一校の訓導たり爾后教育事務に從ふこと數年時に君年十八歲なり其祖先醫業に屬するを以て君玆に始めて醫學に志し本縣病院に入て西洋醫學及ひ獨乙學を渡忠純に受く然れとも君未た以て足れり爲さるなり明治十三年去て東京大學醫學部に入り別課醫學の科程を修め遂に能く全科を卒業し東京大學に於て卒業証書を授與せらる實に明治十七年二月十六日なり君自ら惟へらく故鄉山梨の人氣たる常に新奇を好むの風習あり故に吾今歸縣開業せは一時名譽を博せんこと必せり況んや父母の寧省も亦意の如くなるへし然れとも是れ小成に安んする者の所爲のみ若かす大成を後來に期せんにはと君意一決是に於て尙ほ京地に在り時に出て各縣を漫遊して諸大家諸國手の門を叩くも尠なからず東京に在りては橋本綱常、石黑忠悳及ひ須田の諸氏に就て內外科の實地手術を經驗する事多し會ま君が父大患に罹るを以て君鄉里に歸る居ること數月父の疾急るを待て再ひ出京せんとするも聽されす君是に於て斷然決意其自宅に開業す乃ち今を距る五年前明治十八年三

月なりし翌十九年五月山梨縣病院に奉仕し又南都留郡谷村分病院に轉勤し服務一年又本院に復仕する等終始匆忙身に寸隙を得す以て醫務の熟達と他の風望の多きとをトすへし爾後院長長町醫學士の左右に在て懇切の教授を受け且常に其實地治療に隨伴すること前後四年間爲めに大に得る所あり終に能く一家を成すに至りたりと云ふ是れ君勉强の致す所と雖とも亦焉んぞ其嚴君養成の素あるに非ざるを知らんや君天資純良容貌優美外觀を以て之を評すれは一美丈夫と云ふに過きざるものゝ如しと雖も醫術上其腹中の蘊奥を叩くときは更に又美なるものあり其淺深容易に窺ふへからざるなり而して本年五月香川縣に赴任せり

甲府市常磐町　夏見義處君

君は滋賀縣甲賀郡夏見村の人安政五年を以て生る夙に水口藩學校に於て漢學を學ひ尋て京都府立病院醫學部に入り苦學數年卒業の後教師獨乙ドクトル、ヨンゲル氏に

從ひ內外眼科を專修し更に東京慶應義塾醫學所に入りて遂に醫學全科を卒業す在學中品行方正學術優等を以て京都の松波某愛知の平松某滋賀の君を三傑生と稱せらる（載せて横濱開業醫立志編中平松氏の部に在り）其後英國ドクトル、ホールズ氏米國ドクトル、シモンズ氏同ドクトル、エルドリッチ氏に就き研究すること數年得る所尠からす既にして靜岡縣廣生病院長に招聘せらる十九年六月期滿ち職を辭す偶ま同鄕人某甲陽醫院なるものを甲府櫻町に設くるや之に長たらんことを請ふて止す遂に諾して之に應す其後該院君か所有に屬し現住常磐町に移せり先是地方衛生會員と爲り醫會々頭と爲り撿疫委員と爲り慰勞賞譽の恩賜を受ること前後數回本縣に移轉以來同業諸氏と醫會を發起し衛生會を創立する等常々力を公共に致さる抑々君か如きは須臾も醫家の責任を忘れさるものと謂へし君最も內科に精し加之天資淸廉高潔忠愛信義是れ精妙なる技術の外に特に信用を博する所以にして今日の聲望豈偶然ならんや舊作あり其志の一斑を知るに足らん

偶成

平生偏ニ恐ル辱ニ雙親ヲ遺訓朝レ眼ニ新ナリ
最モ惜ム年光如ニ逝水ノ又如ニ流蘋ニ
從來富貴夢中ノ夢畢竟一外ノ塵
但々得テ青囊ノ眞秘訣ヲ願ハ成ン故國閭門ノ春

中巨摩郡明穂村
桑島尚謙君

君和歌山縣の人なり年六十の高齢に達するも猶壯時の勇を減せず曩に賴山陽の門人にして大坂府の大醫大熊文叔の門に入り醫學を研究し大に得る所あり人互に相語りて他日良醫とならんと年二十二歳にして本縣に來り今の處に開業す君は從來漢醫にして內外科の治術に富むも君の長技は產科にして大に老練の評あり是即ち患者門に市をなす以所にして本村に故に明穂醫院を設立するに至る名聲の日一日に加はる眞に君の名譽を謂へし而して君曾て塾生を養生して醫道を擴張せんと已に君の門弟にして數名の開業醫を出すに至れり近世峽中に得かたき漢醫と謂ふへし

甲府市若松町
深澤清君

君、父を玄臺、祖父を玄益と稱す歷代漢醫を以て業とす父玄臺の代に至り故ありて江戸に在り山城河岸喜左衛門町に居す君此時を以て生る時に安政二乙卯年八月二日なり君の幼なる穎悟機敏醫學を父玄臺に受く學ふとして得ざるなし既にして學業頓に進み其志巨人の如し後明治革新となり山梨縣病院設立の擧あるに及ひ君先つ奮て之に入り鋭意勉勵寸時も怠らす且つ餘力を以て獨逸學を渡忠純に學ひ日ならすして其上達を見るに至れり病院大に君に觀る所あり忽ち擧られて同院十等醫員を命せられ尋て其十一月を以て進て九等醫員となり延て翌七年九月に至る會ま病院閉鎖君亦隨て醫員を免せられ更に囚人治療及ひ種痘梅毒檢査掛を命せらる幾何なく病院再設す其翌八年一月を以て君復た擧られて六等醫員試補に置かる其の九年五月等級改正の

事あるや進んで八等醫員試補となり仝十二年八等醫員に榮進同十三年衛生課御用掛となり其十二月七等醫員に進めり君學術益す進み其十四年二月內務省成規の試驗を經て及第し醫術開業免狀を領せり本縣人にして成規の試驗を經て此免狀を得たるは君を以て嚆矢とす同年五月醫術試檢委員となり又進んで六等醫員に其十六年に至り更に進んで五等醫員に仝十八年に至り四等醫員となり並に藥舖免許試驗委員を命せらる後遂に病院を辭して自家に開業せり時に明治二十一年なりし君治術巧妙外科醫術は最も其長する所なり開業以來救治上一般に益すること尠なからず且つ君深く山間僻地治醫の普及せざるを憂ひて一書を著はせり名けて急病自療法と稱す蓋し普通人家に得易き物品にして効能あるものを指示し良醫なきの地も咄嗟間克く各人急病の變に應せしめんとする誠意に出たるものなり亦以て醫は仁術の呼稱に背かざるものと謂ふへし君の病院に在るや前後十有六年其治術の他に勝れるのみならず勵精勉務曾て一日の怠懈あらざりし等醫員中絕て無き所にして稀れにありたるのみ曾て地方徴兵醫員となりしこと幾回なるを知らず又た檢疫委員に撰はれ傳染病の豫防、虎

列刺病の消毒撲滅等に盡力したること尠からず賞金等の光榮を得たること亦甚だ多し殊に辭職の時金百圓を下賜せられたる如き多く比類を見さる所なり又廿三年一月上京し幾んと一年間專ら外科眼科の研究に志し佐藤博士の門に入つて外科を井上眼科病院及須田眼科病院に入つて井上達也須田哲造等の大家に親炙して眼科を研究し大ひに得る所あり是に於て始めて君か宿志を達することを得たり故に今日君の門病客の群集する固より其素なきにあらざるなり君詩を好む曾て作あり一二を左に錄す

春日効行

野邊春色暖風加、幾個人家帶綵霞、忽見前途入詩興、何來双蝶舞黃花、

中秋無月

高堂何事轉凄々、雲雨冥々望欲迷、秉燭樽前偏思月、不關今夜及晨雞、

登古城

木履攀登躑躅城、々狐夢暖草叢生、英雄壯氣今堪慰、竹外頻聞黃鳥聲、

甲府市錦町

醫學士　伊庭秀榮君

君は其本貫東京府下京橋區銀座一丁目四番地にあり士族なり慶應三年二月を以て家生る資性敏捷其書を讀むに方りては殆んど寢食を忘れんとするものゝ如し幼にして疾く醫業に志し四方大家に就て學ふこと其數を知らず遂に醫科大學に入て卒業し尋で助手と爲る會ま本縣病院副院長を聘するに方り君乃ち聘せられ現に副院長たり病院今日の隆盛を極むる所以のもの院長其人の致す所と云ふと雖とも君の力相俟て以て致したるにあらざらんや其履歷の觀るへきもの甚た多し今ま一枝筆の擧くへき所にあらざるなり

甲府市三日町

磯野豐君

君、父を淳道と稱し（今は亡せり）世々醫を以て業とす其居所は祖先傳來の邸宅なり亡父淳道特に漢方に巧妙を極め當時良醫中の一人なり君は其長子にして幼より其薫陶に親炙し藥劑の投合及ひ代診等寸時も醫事の實習にあらさはなく隨て年一年經驗汎く熟得する所尠なからす既にして明治の革政に際會し本縣病院の創設あるや君乃ち之に入て洋方を修めしに進歩甚た早く幾何なくして其醫員に採用せられ當時の醫員中に頴脫せり後職を辭して新柳町梅毒檢査醫となり其定日を以て出張せしが內外繁忙に堪へざるを以て遂に又之を辭し其自宅に開業せると故の如し君性順良患者に接する殷勤鄭重、治療亦人を服するに足る者あり故を以て患者の多き市內刀圭家中の第一位を占むるとなり然れとも古語に曰はすや醫は三世ならされは其藥を服せすと今日の流行をす致所以のもの治術君の長するに因ると云ふと雖とも抑も亦其祖先世々の餘澤にあらざるを得んや

甲府市錦町

飯嶋次之助君

君は茨城縣常陸國新治郡上浦町の人にして其籍平民に在り安政四年十月を以て其鄉里に生る幼にして漢學を修め尋て醫學に入る天資敏捷學ふとして得さるなく早く醫道の淵奥を究めたり君是に於て益々奮發東京に出て大家各所の門に入り後又順天堂に入て研究し學理實地と其修得する所甚た多し遂に內務省の成規を蹈んて其試驗に卒業し後明治十三年を以て本縣に來り病院六等醫員に拜命し尋て四等醫員に昇り更に又日野春病院長となる既にして職を辭し現今の所に開業す君資性溫厚而して又能世才に通し病客に對する極めて殷勤切實、實に現今の流行醫なり

甲府市紅梅町 三嶋義成君

君は本縣東山梨郡某村の人なり天保十四年十一月其本籍に生る幼より醫道を修め銳

業し早く已に同府下良醫中に算せらる明治十一年轉して信州小室に開業し頗る隆盛を極めしに都合ありて本縣に來り現在の所に開業す患者甚た多しとなり

明治二十五年六月十九日印刷
明治二十五年六月廿一日出版

著述者兼發行者　山梨縣甲府市相生町七十九番戸　鈴木唯美

印刷者　山梨縣甲府市太田町五十七番戸　加藤鶴吉

特25
218

山梨医家列伝

国立国会図書館

005146−000−4

特25−218

山梨医家列伝

鈴木　唯美／著

M25
ACE−1982